

2013 年度 中央大学特定課題研究費 ー研究報告書ー

所属	文学部	身分	教授
氏名	古賀 正義		
NAME	MASAYOSHI KOGA		

1. 研究課題

(和文) 困難を有する若者にとっての「ソーシャルスキル」認識

(英文) "Social Skill" Recognition of "At Risk" Youth

2. 研究期間

2年間

3. 研究の概要（背景・目的・研究計画・内容および成果 和文 600 字程度、英文 50word 程度）

(和文)

2009年制定された「子ども若者育成支援推進大綱」には「困難を有する若者」という表現がある。不登校やひきこもりなど対人不安によって社会参加が困難な者、あるいはいじめや非行など社会性の形成が不十分な者などをさす。こうした排除されやすい若者に、学校内外で、ソーシャルスキル獲得による社会参加参画の機会を支援することが政策課題として求められる。

そこで、本研究では、2010-11年度の都立高校中退者を取り上げ、従来の学校不適応という典型的な「困難」理解を見直すため、当事者へのアンケートと聞き取り調査を行った。それによると、退学原因として生活リズムの乱れや対人関係の不具合をあげる事例が多く、また中退後に長期間に及ぶ就学も就労もしないインターバル期間が存在しやすいこともわかった。さらに進路指向によって、社会復帰のために治療・福祉的支援を求めた者と就労的支援を求めた者とのソーシャルスキル認識の違いがあることも指摘できた（『社会学年誌』等）。

この知見を踏まえて、排除型社会の問題と支援方略の研究が進む欧米を先駆とする必要がでてきた。アメリカでの修復的司法を基盤としたティーンコート（少年裁判）実践に関連して、スペインでのプロジェクト・オンブレ（治療共同体運動）も調査すると、非行（薬物使用）などの問題行動をおこす若者に、共同生活による対人関係の調整や作業活動への参加と、通所による家族を含めた心理治療活動との併用によって、ソーシャルスキルの獲得を促しつつ、社会参加を促進する事例の多いことがわかった（「教育学研究会」等口頭発表）。

(英文)

We researched about "social skill" recognition and promotion of "At Risk" youth as follows:

- (1) Drop out students in Tokyo public high school was analyzed by the questionnaire and the interview survey (2012-2013).
- (2) Educational and therapeutic treatment program "Proyecto Hombre" for young offenders in Spain was researched by the ethnographic and the interview survey (2013-2014).

4. おもな発表論文等（予定を含む）

<p>【学術論文】（著者名、論文題目、誌名、査読の有無、巻号、頁、発行年月）</p> <p>(1) 「液化化するライフコース—都立高校中退者調査からみた中退問題と支援」(早稲田大学社会学会『社会学年誌』第55号(2014.03)3-18頁、査読有) (2) 「液化化するライフコースの実証的分析—都立高校調査からみた中途退学者の意識と行動」(中央大学『教育学論集』第56集(2014.03)21-64頁、査読無) (3) 「都立高校生の進路選択過程に関する継時的研究—困難地区の進路多様校や特色校等を事例として」(中央大学『教育学論集』第57集(2015.03)13-41、査読無)</p>
<p>【学会発表】（発表者名、発表題目、学会名、開催地、開催年月）</p> <p>(1) 「進路選択」はどのようになされているのか—調査からみた都立高校中退者の意識と行動(日本教育社会学会第65回大会(2013.09)) (2) ティーンコート実践における青少年の参加参画—ワシントン等での観察事例から日本犯罪社会学会第41回大会(2014.10)) (3) 都立高校中退者のライフストーリーに関する実証的分析—退学経験は何をもたらしたのか(日本社会学会第87回大会(2014.11)) (4) 「プロジェクト・オンブレ(治療共同体運動)とスペインの若者文化・薬物乱用」(中央大学教育学研究会・近藤京子と共同発表)(2014.11))</p>
<p>【図 書】（著者名、出版社名、書名、刊行年）</p> <p>(1) 「ソーシャルスキルとは何か—困難高校卒業後の就職をめぐるエスノグラフィ」(『現代思想』(特集・就活のリアル)41巻5号(4月号)青土社(2013.04)132-142頁) (2) 「「マナー不安」の時代—職場適応のスキルを物語る若者たち」(加野芳正編著『マナーと作法の社会学』東信堂(2014.10)64-106頁) (3) 「アメリカ格差社会を生き抜く—困難を抱える子どもの事例から」(『児童心理』平成27年2月号(第69巻3号)金子書房(2015.02)54-61頁)</p>
<p>【その他】（知的財産権、ニュースリリース等）</p> <p>(1) 「ジェネレーションZと近未来のワークスタイル」 <Vistas Adecco (日経ビジネス関連雑誌) No.38 2014年6月号></p>